

その人の自然な表情を引き出し、遺影にする

i-face(アイ・フェイス)

# 家族に遺す「顔」は自分らしさが伝わる表情で！

「最期のお別れ」のとき、遺族の悩みの種の一つが遺影の選択。とっさに必要になっても、なかなかピッタリの写真が見つからない。ならば生前から、家族に遺す遺影をあらかじめ選んでおきたい。では、どんな写真を家族に遺すべきか。改めて自分の「顔」を振り返ってみると、これまで生きてきた足跡と、これらの生き方が見えてくる。

葬儀の時はもちろん、その後もずっと故人の忘れ形見として飾られる遺影。どのような顔を家族に残したいのか、考えたことはあるだろうか。

実際、身近な人が亡くなった際、遺影をどうするか、悩む遺族は少なくない。慌てて記念写真を探しても、何十年前のものしか見つからなかったり、やっと見つかったものはどこか表情が固い……。

終活カウンセラーでもある石崎公子さん。20年以上働いた広告業界の出身で、いい表情を引き出すプロデュースを始めたのは遺影がきっかけだった。



終活カウンセラーで、「i-face」を展開する、トラベシアの石崎公子さん。この写真も、自分の遺影を意識して撮った一枚だ

## 自分の顔を見つめ直すことで、これからの生き方を考える

「最近では、エンディングノートを書くと考えの人が増えていきます。でも、なかなか書けない人が多い。そこで私は、『まず遺影から考えてみましょう』と提案しています。遺影にしたいくらいのお気に入りに



「i-face」で撮影した写真は、フォトブックにもできる。オリジナルの写真集として、家に保管することも選択肢の一つ



その人が好きな事を語る瞬間を撮る撮影サービス「i-face」。自然で飾らない、自分らしい顔を写真に残すことができる



達と楽しく話をしている時だった。そんな写真を見直してみると、

りの写真を選ぶ、というのはイメージしやすく、格好の入り口にもなると思うのです」

いつ、どこで、どんな格好で撮った写真がいいか、それを考えるところから始める。もし一つに絞れなければ、候補を用意して家族と話してもいいし、エンディングノートに書き残してもいい……。大切なのは、遺影について考えることで、自分の「今の顔」を見つめ直すことだと石崎さんは話す。

「私がお勧めする理想の遺影は、綺麗に着飾り意識して撮った顔や無理に笑った顔ではなく、その人の声や聞こえてきそうな、自然な表情の写真です。じゃあ、自分はどんな時に自然な顔をしているのかと考えると、何かに夢中になっている時だったり、お友達と楽しく話をしている時だった。そんな写真を見直してみると、

きっと自分の顔に自信が持てるはず。遺影選びは、メッセージを考えることと同時に、今の生き方を考えることにもつながります」

そんな写真はなかなかない（撮れない）、という人に向け、石崎さんは自然な顔を引き出す撮影サービス「i-face」を行っている。トークのプロ（ヒキダシト）と名付けている」と好きな話題や得意な事などについて語り合う最中に、プロのカメラマンが撮影するというものだ。撮影場所も、その人になじみ深い場所を選ぶ。好きな事を話すその瞬間を撮るから、写真館での記念写真撮影のように表情が強張ることもなく、日常見せる「良い表情」が引き出せるというわけだ。希望すれば、撮影した写真のフォトブックも作成できる。遺影に限らず、様々な目的で利用されているという。

「遺影にもエンディングノートにも言えることですが、何を伝えるか考えるということは、今を考えると重要なことです。たとえば、『もっと優しい顔になりたい』と思えば、そこから人は優しくなれるかも知れません。今のあり方を見つめ、これからの生き方を考える。遺影を選ぶとはそういう行為ではないでしょうか」